

# 熱く楽しく いつまでも

土煙を上げて道なき道を突き進む。世界一過酷と言われる「パリ・ダカールラリー」で、篠塚建次郎(64)が総合優勝を果たしたのは1997年のことだった。

2008年、篠塚は母校の東海大学で、ラリーでなじんできたものとは全く様子の違う車に目を奪われた。

平たい車体いっぱいには張られたパネルが、太陽の光にきらめいている。空飛ぶじゅうたんのような車、それがソーラーカーだった。

母校には講演で出かけたのだが、そこで南アフリカでのソーラーカーレースに参戦するチームと知り合った。フリーのラリードライバーだった篠塚は、一員に加わり、ハンドルも握ることになる。

そのレースで東海大学は総合優勝した。太陽光エネルギーだけが頼りの11日間4200<sup>キロ</sup>は、篠塚に転機をもたらす。「これは何かの役に立つんじゃないか。一生の仕事になるかもしれない」

篠塚は大学1年でラリーと出会って以来、40年あまり世界を駆け巡ってきた。三菱自動車の社員ドライバーとして日本チャンピオンになり、「パリ・ダカール」で広く名を知られるようになった。

その歴戦のドライバーに、ソーラーカーは美しく、そして好ましく映った。太陽光がエネルギーなのだから、スピードを欲すれば身軽でなければならず、したがって一切の無駄を省くことになる。



①ファルコン②山田修司さん提供  
③山田修司さん

「現代の市販車は快適で安全だが、豪華で重過ぎる。ソーラーカーには、車本来の役目である『走る』がある」  
ぜいにくをそぎ落とした美しさ、爽快感。環境重視という時代の要請にとどまらない魅力が、そこにはある。

篠塚をソーラーカーの世界に招いたのは、東海大のチームにいた山田修司(65)である。篠塚とは同世代、南アフリカのレースに出た時には相部屋で過ごした。

山田は静岡県東海大工高校(現・東海大翔洋高校)で自動車工学部の顧問をしながら、名車の誉れ高い「ファルコン」を95年に完成させた。96年、オーストラリア縦断のソーラーカーレースに、日本初の高校生チームとして出場する。3千<sup>キロ</sup>を完走し、13位と健闘した。

いま山田は広島県の呉港高校で教壇に立つ。その山田に昨年、篠塚が声をかけた。「ソーラーカーチーム篠塚」の監督に迎えたのだ。

もっとレースに参加し、工

夫を重ね、ソーラーカーの進化を早めたい。篠塚はそう考えている。車の性能はモータースポーツによって向上してきた。エンジン、タイヤ、全てはレースで鍛えられる。ソーラーカーにもそれが必要なのだと篠塚は言う。

「ソーラーパネルなどの技術面で日本が世界をリードできればいいと思う。企業が本気になった時の進歩は、すごいものがありますから」

化石燃料の確保はこの先見通しが利きにくい。太陽光エネルギーは賭けてみる価値がある――。篠塚はそうも考えている。山田も思いを共有し、ソーラーカーが一般車として広く普及することを願ってやまない。

今日までモータースポーツの世界をのぞき見てきた。マン島に爆音を響かせ、鈴鹿サーキットで腕を競い、F1に挑戦しエンジンを磨き上げて、日本はここまで来た。

いまソーラーカーの姿に、車の――モノづくり日本の歩みを思う。みんな熱かった。

F1のスピード、ソーラーカーのスピード。車もレースもさまざまにある。だが走ること、その楽しさと奥の深さは、いつだって変わることがない。  
(有吉正徳)



篠塚建次郎さん

このシリーズは文を有吉と六郷孝也、田村隆昭、写真を伊ヶ崎忍が担当しました。文中敬称略